

# 奈良大学所蔵の掛幅について

— 墨江武禪・大西圭斎・瀧和亭 —

\* 三宅良宜

## 要旨

本稿では、学校法人奈良大学が所蔵する掛幅のうち墨江武禪、大西圭斎、瀧和亭の掛幅作品三幅を紹介する。

最初に墨江武禪「楼閣山水図」を紹介する。墨江武禪は大坂で活躍した絵師である。この「楼閣山水図」は木や人物などに雪舟の画風を想起させる要素が見られた。制作年代は判明しなかったが、武禪が雪舟作品を学習していたと証左できる作品であろう。

次に大西圭斎「蓮池群鷺図」を紹介する。大西圭斎は江戸時代後期の南画家である。「蓮池群鷺図」は画中に圭斎による賛文が書かれ、それによって本作が文化九年（一八一二）に制作されたことが判明した。

最後に瀧和亭「七香図」を紹介する。瀧和亭は明治時代に活躍した南画家である。のちに帝室技芸員に任命された。「七香図」は輪郭線を使わない没骨のみを用いて描かれている。画中の賛文から明治二十一年（一八八八）に制作されたと判明した。

以上の三作品を紹介し、いずれも貴重な作例であることを見出した。

キーワード：墨江武禪、大西圭斎、瀧和亭、奈良大学

## はじめに

奈良大学は博物館学芸員資格取得課程が設置されており、本稿で紹介する掛幅は大学内で実施する講義の教材として購入されたものである。また、博物館学芸員資格取得課程の講義だけでなく、文学部文化財学科の講義で教材として使用される。

奈良大学が所蔵する掛幅はいくつかあり、本稿ではその中でも特に優れた作品を三点紹介したい。

### 墨江武禪「楼閣山水図」

最初に紹介するのは、墨江武禪筆「楼閣山水図」（図1）である。

墨江武禪（一七三四～一八〇六）は大坂で活躍した、いわゆる大坂画壇の一人である。名を道寛あるいは寛、字は子全、通称は与兵衛や

莊藏、号は武禪の他に、蒙斎、心月、濛濛斎、墨江斎などを称していた。武禪は永田屋の屋号を持つ家に生まれ、船町に住んでいたとされている。絵は月岡雪鼎に学んだ。安永六年（一七七七）の『難波丸綱目』には「舟丁 墨江斎武禪」とあることから、この頃には絵師活動をしていたことが窺える<sup>1)</sup>。師の雪鼎が美人画を得意としていたため、武禪の初期作品にも雪鼎風の美人画が数点見られる。しかし次第に中国絵画などに影響され、山水画を多く描くようになった。

本作も武禪の山水画の一つである。本作は楼閣山水を描いた絹本墨画淡彩の作品で、本紙は縦九四・〇cm、横四三・六cmである。箱書はないが、木口に「墨江武禪 楼閣山水図」と書かれており、本作の画題はこれより判明する。

それでは画面を見ていこう。急峻な山々のなかに楼閣が建つ景色が広がる。画面手前には二人の人物が楼閣へ続く道を歩いている様子が描かれている。この二人の人物の先には、頭巾を被った人物が描かれている。この人物は非常に小さく描かれているが、頭巾の形を見ると、雪舟の自画像に描かれる姿とよく似ており、武禪が雪舟画を見ていた可能性も考えられる。

雪舟のような人物の背後には楼閣があり、その楼閣の左上には亭があり、中には二人の人物が向かい合うようにして座っている。この亭の手前には、岩肌から二本の巨木が生えている（図2）。この二本の巨木は、雪舟筆「四季山水図巻（山水長巻）」（毛利博物館蔵）に描かれる樹木や葉の表現、幹の輪郭線などが類似している。

亭の右上には水景が描かれ、帆船が二艘浮かんでいる。帆船のやや右上には、五重塔と金堂もしくは法堂のような建物が描かれているので、おそらく寺院であろう。この寺院の背後には屹立した岩山があり、さらに画面奥に向かって岩山が続く遠景が描かれる。その遠景の岩山に、輪郭線と淡墨のみで表現された山が見える（図3）。この山の形は、武禪「山水図」（個人蔵）にも同様の山が描かれていることから、武禪による山の表現方法の一つであろう。

次に落款印章を見ていこう。画面上部左端に「武禪寫」の落款が書かれ「道寛」の白文方印が捺されている（図4）。武禪の落款印章はいくつかあるが、本作と同じ落款印章の組み合わせは、前述した「山水図」や「秋山残霧図」（個人蔵）、「山水図」（個人蔵）、「雪中図」（個人蔵）、「龍図」（個人蔵）など他の作品にも見られる。このことから、本作はこれらの作品と同じ時期に制作されたと考えられる。しかし、武禪の作品には、本作と同じく年記が書かれた作品は少ないため、具体的な年代を提示することは、今のところ困難を極める。これについては今後の研究の発展に期待したい。

### 大西圭斎「蓮池群鷺図」

次に大西圭斎「蓮池群鷺図」（図5）を紹介する。

大西圭斎（一七七三〜一八二九）は江戸時代後期の南画家である。名は允で、字は叔明。号は圭斎の他に、幽溪・小痴道人などがある。

豊前中津藩の藩士の子として江戸で生まれ、豊前中津藩藩主奥平家に仕えた。絵は、はじめに宋紫石に学び、その後、谷文晁に学んだ。弟子に岡本秋揮などがある。

さて「蓮池群鷺図」を見ていこう。本紙は縦八二・四cm、横四一・四cmで、絹本墨画の作品である。箱蓋表には「大西圭齋蓮池群鷺圖本豎幅」、裏には「大正四年乙卯秋晚 老雲居士 白文方印（印文不明） 朱文方印（印文不明）」と書かれている。

では画面を見ていこう。画面全体に大きな池が広がっている。その池に向かって右手前から左へ右へと蛇行するように蓮が自生し、画面奥へ続いている。所々で枯れている蓮花や葉が見られるため、季節は秋であろう。また蓮の間からは芦の葉が見取れる。そして、この蓮で隠れるかのように白鷺が描かれている。画面上部を見ると、飛来してきた白鷺が六羽描かれている。その白鷺の右下には、二羽の白鷺が描かれている。この二羽の白鷺の目線は、上空へ嘴を仰ぐ二羽の白鷺に向けられている。この白鷺たちはまるで会話をしているかのようである。画面の下部を見ると、一羽の白鷺が池の魚を捕まえようとしており、その周囲にいる白鷺たちも魚を捕まえようと池に顔を近づけている。このように、白鷺はユーモアの溢れる姿を描いている。

次に本作の技法を見ていこう。まず白鷺を見ると、胡粉などを使っておらず、輪郭線もないため没骨を用いていることが見て取れる。白鷺を白く見せたために、池は淡墨で表現している。そして蓮の花や葉、芦は、白鷺と同様に没骨が用いられ、濃墨で表現されている。こ

のため、何も塗られていない白鷺と濃墨の蓮という対比が、画面全体を覆い尽くしているのである。

最後に、画面の上部に書かれている賛文（図5）を見ていこう。賛文を翻刻すると、左記のようになる。

頂絲巻秋風

壬申秋晚写于

白醉楼上

圭齋西允 「圭」朱文方印 「齊」朱文方印

これを訳すと、「壬申の年の晩秋に昼酒を飲み上機嫌になりながら写した」という意味になる。「壬申」は圭齋の生没年より勘案すると、文化九年（一八一二）となる。箱書には、「大正四年」と書かれているが、賛文と筆跡が異なるため、おそらく箱を新たに製作した時の年号と思われる。よって、本作は文化九年（一八一二）の秋に制作された圭齋の晩年作品の一つと考えられるだろう。

### 瀧和亭「七香図」

最後に瀧和亭「七香図」（図7）を紹介する。

瀧和亭（一八三〇～一九〇二）は、はじめ大岡雲峰に師事した。長崎に遊学し、鉄翁祖門、木下逸雲、陳逸舟らと交友して明清画を学ん

だ。明治六年（一八七三）、ウィーン万国博覧会に花鳥画二点を出品した。明治十年（一八七七）には、第一回内国勸業博覧会に「松樹牡丹」を出品し、花紋賞牌受賞した。その後も受賞を重ね、日本画旧派の重鎮として活躍した。そして明治二十六年（一八九三）九月二十五日に幸野棟嶺らとともに帝室技芸員に任命された。

没後には『和亭全集』や『和亭集』が刊行され、和亭の作品が多く紹介されている。だが時を経るにつれて和亭の存在は忘れられていた。ところが近年、Rosina Backland氏の著書『Painting Nature for the Nation: Taki Katei and the Challenges to Sinophile Culture in Meiji Japan』（ Brill社、二〇二二年）が刊行された。<sup>3)</sup> さらに二〇一九年にはWorld Museum のおとつ「Drawing on Nature: Taki Katei's Japan」が開催された。和亭作品の展示されるのはこれが国外初であり、和亭が再注目されはじめたと言えよう。

それでは「七香図」を見ていこう。本紙は縦一五九・六cm、横五二・八cmで、絹本墨画淡彩の作品である。箱蓋表には「瀧和亭先生七香之図 着色絹本一幅」と書かれている。

画面を見ていこう。画面向かってやや右中央には胴の長い花瓶があり、菊、水仙、紅花、梅が花瓶から溢れ出るように挿している。その花瓶の前には金木犀、リンドウ、牡丹などが描かれている。花瓶や花、葉は、たらし込みで描かれていることが見て取れる。花瓶はたらし込みによって、まだら模様のような表現がなされている。また、花瓶のたらし込みの墨は、菊や水仙を避けていることから、菊や水仙などの

花を先に描き、後から花瓶を描いたと思われる。これらの花瓶や花の他は何も描かれておらず、本作は非常にシンプルな構図をしている。本作のような構図は、他の和亭作品にも見られる。『和亭全集』（画報社、一九〇七年）には「四時花果図」（図8）、『和亭集 下』（国華社、一九二二年）には「百事如意図」（図9）や「芝蘭図」（図10）が掲載されており、これらの作品が現存するかは定かでないが、本作と同様に胴長の花瓶に挿す様子を描いた作品はいくつか存在することが判明した。<sup>4)</sup>

次に本作の賛文を見ていこう（図11）。本作の賛文は画面上部向かって左に書かれている。賛文を翻刻すると、左記のようになる。

#### 七香之図

戊子秋九月下瀟寫為

棠陰大島先生高囀

和亭居士謙「瀧印和亭」白文方印 「蘭田」朱文方印

これを訳すと、「戊子の年の秋九月下旬に大島先生の依頼によってこれを描いた」となる。

「戊子」は和亭の生没年から考えると、明治二十一年（一八八八）であろう。「大島先生」は、東京仏学校の校長であった大島誠治と思われる。それは大島が校長を務める東京仏学校法律科が明治二十一年（一八八八）八月に文部省から特別認可学校に認可されたため、これを祝

うために大島から和亭に依頼があったと推測する。よって本作は明治二十一年（一八八八）九月下旬に制作されたと考えられる。この年記により、本作は瀧和亭筆「富貴国香『明治諸家書画巻』」（明治二十六年（一八九三）制作、佐野市立吉澤記念美術館蔵）より先行する作品であることが判明した。

### おわりに

以上、奈良大学が所蔵する墨江武禪、大西圭斎、瀧和亭の三作品を紹介した。この三名の画家は、いずれも著名とは言いがたいかもしれない。だが作品を見ると、すべて優品と言える作品であるだろう。この三名の画家の研究をする上で、本稿が研究の一助となれば幸いである。

### 註

- (1) 武禪については以下の文献が詳しい。
- ・岩佐伸一「概説 墨江武禪と林閨苑」（『唐画もん—武禪に閨苑、若冲も』（大阪歴史博物館・千葉市美術館・産経新聞社、二〇一五年）
  - ・伊藤紫織「山水を描き、山水を造る—墨江武禪の絵画—」（『唐画もん—武禪に閨苑、若冲も』（大阪歴史博物館・千葉市美術館・産経新聞社、二〇一五年）
  - (2) 大西圭斎については以下の論考が詳しい。
  - ・伊藤紫織「真景図を写す—武元登々庵をめぐる画家大西圭斎と大原東野—」（『尚美学園大学芸術情報研究』二十六号、二〇一七年）
  - (3) 日本語訳で書かれたものとして、バックランド・ロジャーナ（訳）小林

ふみ子「瀧和亭の花鳥画における日本表象」（『文学』第一六卷六号、二〇一五年）がある。

- (4) いずれも和亭没後に発行された作品集である。執筆にあたっては国立国会図書館デジタルコレクションを参照した。

・和亭全集—国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)  
 ・和亭集下—国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)

### 附記

本稿執筆にあたっては、賛文の解釈について先生方からご指摘ご助言を賜りました。また原口志津子教授よりご指導ご助言を賜りました。末尾ながら、心から深く感謝の意を表します。

### 図版出典

- ・図1～7、11 いずれも筆者撮影
- ・図8 和亭全集—国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)
- ・図9・10 和亭集下—国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)



图2 「楼閣山水图」部分



图3 「楼閣山水图」部分

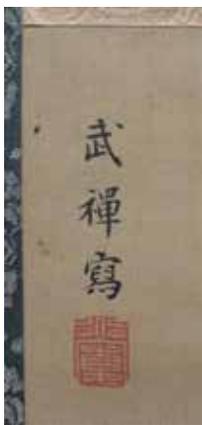


图4 「楼閣山水图」  
落款印章部分

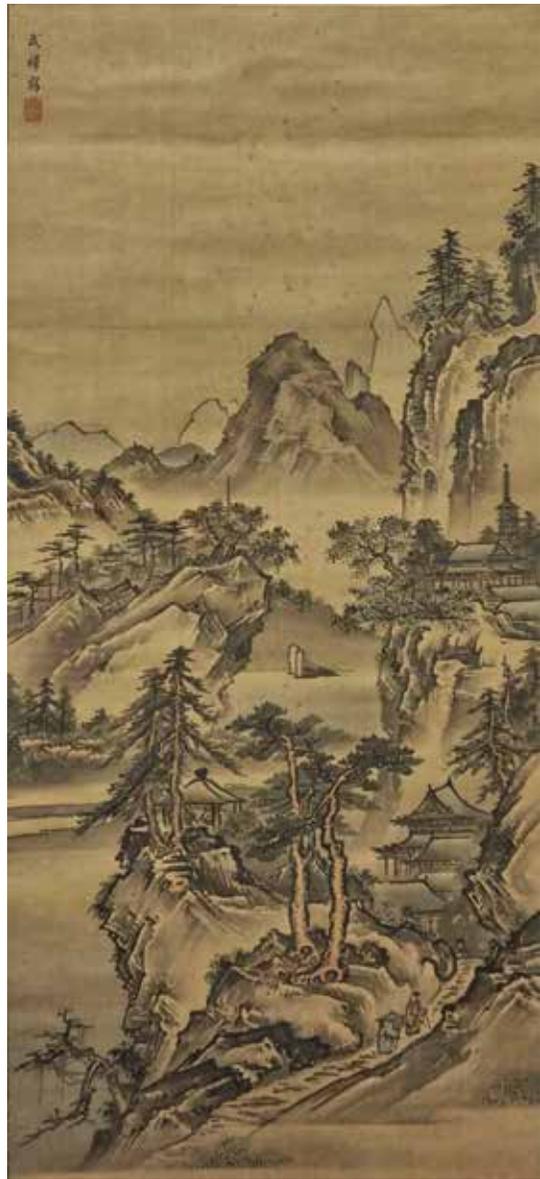


图1 墨江武禪「楼閣山水图」  
学校法人奈良大学蔵

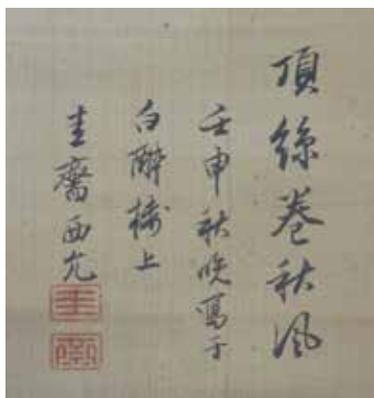


図6 「蓮池白鷺図」部分



図5 大西圭齋「蓮池白鷺図」学校法人奈良大学蔵



图8 『和亭全集』「四時花果図」



图9 『和亭集 下』「百事如意図」



图10 『和亭集 下』「芝蘭図」

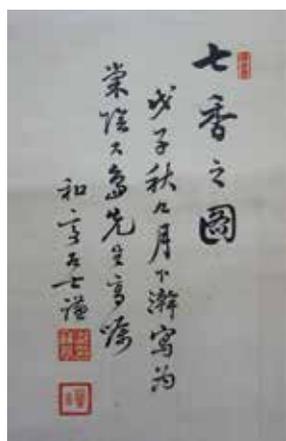


图11 「七香図」部分



图7 瀧和亭「七香図」学校法人奈良大学蔵

## Abstract

Hanging scroll in the collection of Nara University: Focusing  
on Suminoe Buzen, Onishi Keisai, and Taki Katei

Yoshiki MIYAKE

In this article, I will introduce the three-hanging scroll of Suminoe Buzen, Onishi Keisai, and Taki Katei, which are owned by Nara University.

First, I would like to introduce Suminoe Buzen's "Rokaku Sansuizu". Suminoe Buzen is a painter who was active in Osaka. This "Rokaku Sansui" has elements that remind us of the style of Sesshu's paintings on trees. The date of production was unknown, but it can be proved that Suminoe Buzen was studying Sesshu's work.

Next, I would like to introduce Onishi Keisai's "Renchigunro". Onishi Keisai is a Nanga painter in the late Edo period. Keisai's legends was written in the picture of "Renchigunro", and it became clear that this work was produced in 1812 Bunka 9th.

Finally, I would like to introduce Taki Katei's "Shichikou". Taki Katei is a Nanga painter who was active in the Meiji era. He was later appointed as an Imperial Household Artist. The "Shichikou" is drawn using only Mokkotsu (painting without an outline) Technique. From the legends in the picture, it was found that it was produced in 1888 (Meiji 21th).

**Key word** : Suminoe Buzen, Onishi Keisai, Taki Katei, Nara University